

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19530602

研究課題名（和文） 家族システムの発達・変容に世代間の相互作用が及ぼす影響

研究課題名（英文） The effects of the interaction among generations on developments and changes of family systems

研究代表者

赤澤 淳子 (AKAZAWA JUNKO)

仁愛大学・人間学部・准教授

研究者番号：90291880

研究成果の概要（和文）：本研究では、家族システム論に依拠し、核家族と三世代家族を対象とし、量的調査とインタビュー調査を実施し、家族形態、地域、世代という3つの視点から現代家族のあり方を検討した。その結果、家族形態、地域および世代により、家族のとらえ方や成員間の相互交渉に差異が示された。そして、自分以外の家族成員同士の相互交渉が、間接的に自己の心理的健康度にも影響を与えているというように、まさに家族システムの考え方に合致した結果が得られた。また、祖母自身のライフレビューから、個人の歴史のみならず、時代や社会の変化にともなう家族の変化をとらえることが出来た。

研究成果の概要（英文）：

This study aims to verify the idea of family systems through statistical researches and an interview survey into nuclear and three-generation families from the viewpoints of family forms, areas and generations. Not only differences were found as for concepts of a family and communication styles depending on family forms, areas and generations but also found was the fact that relationships among family members other than the subject had affected the mental health of the subject. These findings were in agreement with the idea of family systems. In addition, through the interview survey we find that grandmothers' own life reviews showed their individual histories and the changes of their families in parallel with social changes .

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	4,400,000	1,320,000	5,720,000

研究分野：発達心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：家族システム, 家族形態, 地域, 世代

1. 研究開始当初の背景

少子高齢化や晩婚化などの社会や文化の変化は、家族生活の様相に影響を及ぼすのみならず、自己や地域社会に確立されていたパターンの変動にもつながるものであった。しかし、社会と家族の関係は双方向性をもち、決して一方的に規定されるものではない。現代の家族が、社会の急速な変動に連動しながら、最適なあり方を模索しているとすれば、日本の家族に対する新たな理解と展望が必要であろう。近年、家族構成員の相互関係から人間の成長・発達を捉えようとする動きがあり、これを家族システム論的な立場という。家族は、関係性や歴史性を共有し、ひとまとまりの統合体として機能するという意味で、一つのシステムとみなすことが出来る(中釜, 2008)。そして、「家族システム」を亀口は次のように定義している(亀口, 2006)。「家族システムとは、家族をあるまとまりをもった複合的なシステムとしてとらえる見方である。個人、母子、父子あるいは同朋がそれぞれサブシステムを形成している。各サブシステムも相互に独特の結びや関係を持っている。各サブシステムそれぞれに異なる成長や変化の過程を遂げつつも、全体としては一定の布置や独自のパターンあるいはイメージを保持している」。また、平木(1998)は、家族システム理論とは①家族の問題を成員の発達や親子・夫婦関係など世代的歴史的視点から理解しようとしており、②家族の問題を家族が全体として影響を与え合っている相互交流過程とし、③家族の問題を考える際に、家族と家族をとりまく社会を考慮することに重要性があると述べている。つまり、個々の家族成員や家族間の関係性は、常に互いに影響しあい、相互に発達、変容しているといえよう。本研究では、この家族システム論に依拠し、家族研究をすすめていくこ

ととした。

2. 研究の目的

本研究では、家族としての機能が家族成員の発達や適応に及ぼす影響、社会的状況および家族成員の発達・変化が家族システムに及ぼす影響について検討することを目的として着手された。目的を達成するために、研究の背景から導き出されたいくつかのキーワード—**家族の相互作用**、**歴史性(世代)**、**地域**—を測定するための検討項目を設定する必要がある。

そのため、本研究では、

- (1)家族成員が家族をどのように捉えているか
- (2)家族成員間の関係、
- (3)世代間の関係、
- (4)心理的健康度等

についての調査を通じて検証することを企図した。その際、それらの変数の分析については、「**家族形態**」、「**地域**」、「**世代**」という3つの視点を導入する。

3. 研究の方法

本研究は、第一次調査、第二次調査、インタビュー調査という3つの調査から構成されている。

(1) 第一次調査

青年期の子どもとその母親という二世帯372組を対象に実施している。これらはペアデータとなっている。①家族成員が家族をどのように捉えているか、②家族成員間の関係、③世代間の関係、④心理的健康度等についての調査を実施し、「**家族形態**」および「**世代**」という視点から検討している。

(2) 第二次調査

第一次調査の結果をふまえ、福井県内および全国の三世帯家族および核家族を対象とし実施した。三世帯家族では、祖父母世代につ

いては祖母世代，親世代は母親，子ども世代は青年期の子とした。一方，核家族については，母親とその青年期の計2名とした。これらは，ペアデータである。調査内容は，家族構成，年齢，性別などの基本属性，職業，年収，学歴などの社会経済的内容，および①家族成員が家族をどのように捉えているか，②家族成員間の関係，③世代間の関係，④心理的健康度等であった。これらについて，「家族形態」，「地域」および「世代」という視点から検討している。

(3)インタビュー調査

量的調査から得られた家族形態や地域の特性に関する結果について，インタビュー調査の記述からの裏付けを行うことを目的とし実施した。インタビューは，第二次調査と同様に，三世代家族では，祖母世代，母親世代，子ども世代の3名を対象に実施した。一方，核家族では，母親世代，子ども世代の2名を対象とした。インタビューは半構造化面接を採用し，インタビューの項目は，①家族成員が家族をどのように捉えているか，②家族成員間の関係，③世代間の関係等であった。対象者は，第二次調査の回答者から選択した。また，対象者の居住地は，福井県，都市部（大阪），福井県とは異なる地方（四国）の3地点とした。

4. 研究成果

(1)家族形態による検討

①家規範について

三世代家族においては，伝統的な家父長制度に基づく，長男の継承や先祖崇拝などに関する規範が伝授されていることが明らかになった。これは，世代間継承による影響と考えられる。また，この規範の授受が，家族内のコミュニケーションや価値観の一致など，家族関係や家族システムに影響を及ぼしている可能性が示唆された。しかし，その一方で，家規範に関しては，インタビュー調査に

おいて時代の変化と共に徐々に変化していることも明らかになった。つまり，家族が社会的状況と密接に関連していることが検証され，規範の継承と変化のプロセスを明らかにすることが出来た。

②家族関係について

家族形態により，成員間の相互交渉の質や量には違いがあることが明らかになった。そして，それらの相互交渉と心理的健康度との関連も示唆された。また，その相互交渉は，自己と他者という直接的な二者関係だけでなく，自分以外の家族成員同士の相互交渉が，間接的に自己の心理的健康度にも影響を与えているというように，まさに家族システムの考え方に合致して結果を示すことが出来た。しかし，祖父母との同居経験よりも関わりの質が子世代の高齢者意識の形成には重要であるとの指摘もあり(水上，2006)，今後は，家族形態等に関係の良否を含め，個々の家族成員の家族観や心理的健康度についてさらに検討をすすめていく必要がある。

(2)居住地域による検討

①家規範

家規範という側面における変化は地域的に均一に起こっている訳ではないことが確認できた。このように顕著に示された福井県における規範意識の高さであるが，インタビュー調査でも伺われるように，福井県以外の地方の三世代同居家族においても家規範は伝授されている。よって，今後は，これが福井県のみの特徴であるのか，地方と都市との違いであるか，あるいは祖父母との物理的距離によるものなのか等について，今後はさらに分析をすすめ，地域社会という要因が家族に与える影響についても考察したい。

②家族と地域の相互作用

今回の研究では，地域による家族成員の心

理的健康度の差異は示されなかった。しかし、高齢者の主観的幸福感の規定因の研究では、特に男性高齢者において、近隣との接触頻度の影響が明らかになっている（直井，1990；赤澤・水上，2008）。また，前期高齢者における居住年数と主観的幸福感との関連も示されている（川原，2010）。よって，今後は，近隣との交流，地域での役割，居住年数等も含めた分析を行い，家族と地域との相互作用について検討したい。

(3)世代による検討

①家規範，主観的幸福感，精神的健康度

全てにおいて，祖母世代が他世代よりも高い傾向がみられた，しかし，本研究の調査において，祖母世代のデータは三世同居者のみであるということから，祖母にみられる特徴の解釈には注意する必要がある。よって，今回の結果を裏付けるためにも，三世家族以外の祖母世代にも調査を実施し，比較検討する必要性があろう。

②世代間のコミュニケーションと心理的健康度との関係

祖母世代の心理的健康度と，母親世代および子世代という次世代とのコミュニケーションとの関連が見られた。現代社会は高齢者社会と言われている一方で，高齢者の単独世帯の増加や三世同居世帯の減少により，祖父母と次世代との交流は，質量的に貧困になっている。しかし，赤澤・水上(2008)では，家族形態に関係なく，孫世代が，祖父母の時間的展望促進機能を強く意識しているほど，彼らの自尊心が高まるという結果も示されている。これらのことは，少なくとも祖母—孫間においては，世代間の相互作用が，双方にとってプラスに働いていることを示唆している。今後，さらに高齢者の社会的ネットワークと心理的健康度との関係について詳細に検討をすすめていきたい。

③個人，家族，および社会の連動した変化

祖母自身のライフレビューにおいて，自身が娘の時代，嫁となった時代，さらには姑となった現在が語られ，そこに家族の中での役割の変化が示されていた。そして，その語りには，個人の歴史なみならず，時代の変化や，時代に伴う社会の変化をも含まれており，大変興味深いものであった。このような高齢者のライフレビューを家族という視点から聴取することは，時代や社会の変化にともなう家族の変化をとらえる上で，貴重な資料ともいえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者，研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①赤澤淳子，水上喜美子，小林大祐，家族システム内のコミュニケーションと家族構成員の主観的幸福感—家族形態及び地域別検討 仁愛大学研究紀要，査読無，第8号，2009，1-12

②水上喜美子，赤澤淳子，小林大祐，三世同居意識と家規範意識に関する研究—世代と家族形態からの検討，仁愛大学研究紀要，査読無，第8号，2009，45-52

③小林大祐，赤澤淳子，水上喜美子，家族意識の規定要因分析のための予備的考察，人間学研究，査読無，2009，27-32

[学会発表] (計6件)

①赤澤淳子，三世家族の問題と適応—その光と影 (話題提供：家族成員間のコミュニケーション—地域および家族形態別検討，日本発達心理学会第21回大会，2010年3月28日，神戸国際会議場)

②赤澤淳子，水上喜美子，家族関係が中年期の妻の主観的幸福感に及ぼす影響，日本心理学会第73回大会，2009年8月27日，立命館大学

③赤澤淳子, 家族成員間の関係が青年期の子
の主観的幸福感に与える影響, 日本家族心
理学会第 26 回大会, 2009 年 8 月 23 日,
大阪市立大学

④赤澤淳子, 水上喜美子, 家族システム内の
相互作用が子に及ぼす影響, 日本発達心理
学会, 2009 年 3 月 24 日, 日本女子大学

[図書] (計 0 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

赤澤 淳子 (AKAZAWA JUNKO)

仁愛大学・人間学部・准教授

研究者番号: 90291880

(2) 研究分担者

水上 喜美子 (MIZUKAMI KIMIKO)

仁愛大学・人間学部・講師

研究者番号: 00387408

(3) 連携研究者

小林 大祐 (KOBAYASI DAISUKE)

仁愛大学・人間学部・准教授

研究者番号: 40374871